

どうぞうだんしんきょうぞう
銅造男神鏡像

平安時代後期（12世紀）

田附町の八幡神社が所蔵する鏡像は、直径 17.8 cm、厚さ 0.3 cm、重さ 390 g の薄い銅製鏡板で、この表面に男神像が線刻されています。鏡板総体が昭和 41 年に火を受けて幾分荒れていますが、詳細に見ると、男神像は鳥居形の後屏を背にし、体をやや左に向けながら床机上に座しています。顔はがっしりした面立ちです。眼光鋭く目尻は長く尾を引いており、鉤鼻に小さな口が表現されています。口上には髭がたくわえられ、顎はふくよかに丸くおさめます。頭には冠を着け、身には袍をまとい、手は袖口を合わせて拱手し笏を持っています。

古来、神は不可視のものとされてきたのですが、仏教の影響下で礼拝対象として神像をもつようになります。その姿は僧形と俗体の 2 者が存在したようですが、この鏡像では平安貴族の俗体となっています。もちろん俗体を表現しているとはいえ、その姿は神像にふさわしく尊厳と気品をただよわせています。

この神像は、線刻技法の 1 つである蹴彫で表現されています。蹴彫は先端が扁平な刃をもつ切鑿を軽く浮かせ、蹴るように打ち込んでいく線刻法です。それは、楔形の点が連続してあたかも線のように見えますが、楔形と楔形との間にわずかにすき間があって断続して見える典型的な蹴彫と、密に打ち込んだために一線のようになったずらせ彫があります。この神像では両者が併用されていますが、ともに線が流れるように軽快であり、図像表現の確かさとともに、見事なできばえの作品となっています。

鏡像の裏面は、縁に幅数 mm の断面が台形となる蒲鉾式直線縁を巡らせ、内は素文で鋤さらい仕上げを施しています。上端には懸垂用に釣手が 1 つ付いています。釣手は小さく、中央に 1 孔を穿っています。つまり、この作品は男神像を線刻で表現している点では鏡像ですが、懸垂を考慮している点ではすでに懸仏の域に達しており、鏡像から懸仏へ移行する過渡的形式の作例といえることができます。鏡像に銘文や付属する由緒書は認められませんが、類例から平安時代後期（12世紀）の制作と考えられます。

八幡神社の由緒

銅造男神鏡像は、彦根市の南西、愛知川に面し琵琶湖にも近い田附町の八幡神社に伝来します。八幡神社はかつて若宮八幡宮（略して若宮）と称しましたが、明治維新により八幡神社と改称されて現在に至っています。社伝によれば、奈良時代の天応元年(781)に造営され、在地の田附氏代々の庇護のもと、栗見庄五社中の第二座として興隆を極めましたが、その後、兵火などによる衰退・復興を経て現在の姿をとどめています。

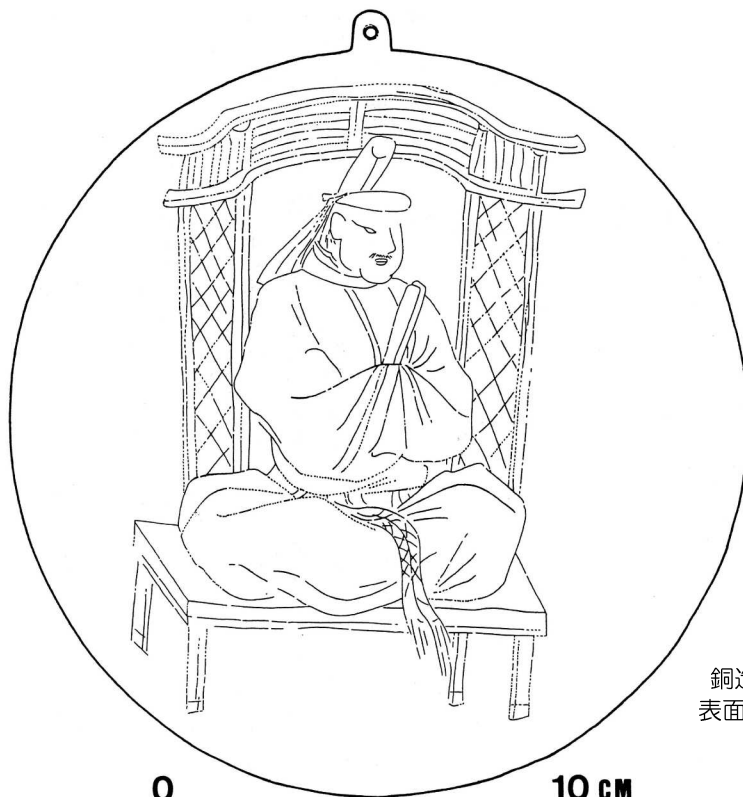
当社には、鏡像のほかにも、弘安6年(1283)に佐々木経泰の御願により奉納された大般若経61巻が伝来し、境内には永仁6年(1298)の年号を刻む七重の石塔がそびえるなど多様な文化財を蔵しています。



銅造男神鏡像 表面



同 裏面



銅造男神鏡像
表面トレース図

